講演録

言葉は道具ではなかった
―わたしがいくつかの外国語を話すようになるまで―

黒田龍之助

主旨

愛知県立大学は、2009 年４月に５学部４大学院研究科からなる新しい大学として歩み出した。1966 年からの歴史を持つ外国語学部も、外国語教育を学部の教育研究の重要な柱の一つとして継承しつつ、組織改編をし、英米学科、ヨーロッパ学科（フランス語圏専攻、スペイン語圏専攻、ドイツ語圏専攻）、中国学科、国際関係学科からなる新しい外国語学部として再スタートを切った。この再スタートの記念すべき年にふさわしい講演会として、外国語学習・教育に造詣が深く、多数の著書やコラムを執筆しておられる黒田龍之助氏に来ていただき、今後の外国語教育・外国語学習を、一般の方、学生達も含めて考える機会として次のように講演会を開催した。

１　講師：黒田龍之助 氏（フリーランス語学教師）

略歴　言語学者・スラブ語学者。1964 年東京都生まれ。1988 年上智大学外国語学部卒。 1994 年東京大学大学院露文科博士課程単位取得満期退学。東京工業大学（ロシア語）を経て明治大学理工学部助教授（英語）を歴任し、2007 年３月に退職。日本放送協会教育テレビのロシア語会話にも出演。 2008 年４月より NHK ラジオ第二放送「まいにちロシア語」講師を務める。「外国語の水曜日」（現代書館）、「ポケットいっぱいの外国語」（講談社）、「はじめての言語学」（講談社現代新書）、「羊皮紙に眠る文字たち」（現代書館）など著書多数。

２　題目：「言葉は道具ではなかった　―わたしがいくつかの外国語を話すようになるまで―」

３　日時：６月２日 (火）14：30 ～ 16：30

４　場所：愛知県立大学（長久手キャンパス）講堂

５　参加費無料、事前申込み不要

６　主催：愛知県立大学　高等言語教育研究所

講演録

「言葉は道具ではなかった—わたしがいくつかの外国語を話すようになるまで—」

黒田龍之助

はじめまして。黒田です。

暑い中、狭くもないですが、それなりの空間に閉じ込められますと、多くの場合、眠気を催します。これは人間の摂理でありまして、どうしようもないのですが、なるべく眠たくならないような話をと考えて用意してきました。学術的な内容ではありませんし、今日ここに座っていると賢くなるということもほぼないと予測されますので、緊張して聞くほどのものではありません。寝てしまわない範囲でどういうふうにやれるかはちょっと自分でも心配ですが、この先1時間ちょっとお話ししたいと思います。

「言葉は道具ではなかった」というテーマを用意しました。スクリーンには紙に印刷したキーワードが映ります。パワーポインターの使い方が分からないからというだけではなく、パワーポインターを使うと、スクリーンに映っているものと、ここにいる、生きている人間が乖離して、ロボットがしゃべっているみたいになってしまいますので、ポイントになるところをちょいちょいと書いた紙芝居形式にしてみました。そんなお笑い芸人もいましたね。これは話が見えなくならないようにと思って書いただけですから、これを全部メモしても、鉛筆が減るだけです。あまり深く考えないでやっていただきたいと思います。

まず、「言葉は道具なのかな？」というところから始めます。

大学勤務は辞めてしまったのですが、今でも非常勤などで教えています。外国語大学で担当する言語学の授業には、こんな感じの教室に 250 人ぐらいの学生が毎回来てくれます。途中で減るかと思ったら、減らないのでありがたいんですが、毎回大変です。話をした後に必ず課題を与えて書いてもらって、レスポンスするという授業です。読むのはものすごく大変ですが、いろいろ面白いことに気づきます。

その授業の最初に学生さんに質問するのが「言葉は道具なのか？」というテーマです。ここから考えていこうというわけです。言語を専門に学ぶ学生たちは、自分が選んだ専門を一体どんなふうに考えているのかを探っていくわけで、別に難しいことではありません。

授業を通して分かったのは、外国語学部の学生さん、それはどこの外国語学部でも変わらないのでしょうけれど、圧倒的多数の人が「言葉は道具である」と信じているということです。

なぜ「言葉は道具である」と考える学生が多いのか。これについては調べがついていませんが、そう考えている人はとにかくたくさんいます。親に言われたのでしょうか。高校の先生でしょうか。それとも、予備校や塾の先生でしょうか。よく分かりません。いずれにせよ、「外国語自身を目指すな。言語自身を目指すな。言語を使って何かをしろ」と、どこかで聞

いてきたようなのです。

では、その「何か」とは何かということです。何を目指すか。文学をやるべきだと言う人はたまにしかいません。政治をやるべきだと言う人もいますが、多くの人の念頭にあるのはビジネスのようです。言語を使ってビジネスをやれという発想です。

でも、それは言語を専門としている人の意見ではなく、ビジネスをメインとしている人の意見ではないでしょうか。どうして言語の専門家に意見を聞いてくれないのかと疑問です。誰も私に「言葉は道具でしょうか」と聞いてくれないので、反論する場もありません。言語の専門家はあまり信用されていないようで、訴えるチャンスすらないのです。今は経済万能といっては失礼ですが、財界など、ビジネスをやっている人が注目されている時代なのですね。それを否定はしませんが、たまにはそうでない人、言語の専門家の話も聞いてもらいたい。ということで、今日の話をしていきます。

ただ、難しい話は楽しくないし、皆さんも私も眠くなるかもしれないので、具体的な話、恥を忍んで自分の話をすることにします。ということで、私の経歴です。

経歴に関しましては、詳しくはウィキペディアをご覧ください。自分でも驚いたんですが、私に関する項目があるんですね。ウィキペディアに載っているデータは一応間違っていませんでした。年号も合っています。ただ、そこに載っているのは年号や著書などのデータだけですので、それ以外のことについて、いくつかインフォメーションを加えながら、私がしてきたことを話してみましょう。

1番目は、理工系大学の元教師です。専任教員としてロシア語を教えたのは9年間、英語を教えたのは4年間ですが、非常勤その他も含めますと、随分長いことといろいろなことを教えてきました。それは後ほどお話します。

2番目は、ロシア語、英語といった具体的な外国語ではなく、言語学の教師。言語学の先生は何をやるのかというのも、後ほどご説明いたします。まあ、ここら辺までは普通ですね。

3番目、国語教科書や入試問題のネタ提供者。この辺りからよく分かりません。私は文章を書いて生きていますが、時々それが入試問題や国語の教科書に使われます。例えば高校の『新編現代文』を見ますと、私の名前がありまして、私の書いた文章が載っています。気まずいことに、若き日の写真なんかも。本当はこの下にビールがあるんですが、切って隠してあるんです。太宰治や夏目漱石と同じように写真が載っていると思うと、すごく不思議です。また、毎年のようにあちこちの大学で入試問題に使われています。ときには著者自身にもよく分からない問題が出ています。このようなもので私の名前を見てくださる人もいるようです。ありがたいことだと思います。

4番目は、テレビ・ラジオのロシア語講座の講師。去年はラジオを担当していまして、今はそれがアンコール放送されています。私はラジオの仕事がわりと気に入っていました。テレビのときには、学者を捨てて、タレントの男の子や女の子と一緒に、自分までタレントみたいにやっていました。テレビ講座は大変でした。私は向いていないですね。こういうのは苦手です。

5番目、スラブ語学者。恥ずかしいんですが、一応専門としてやってきました。スラブ諸語という概念を説明するのは大変なんですが、ロシア語を含めた親戚の言語としましょう。

私が一番初めに書きました本は、ロシア語ではなく、『ウクライナ語基礎 1500 語』です。

大学書林という出版社があって、そこで編んだ単語集が最初です。ロシアとウクライナは接していますから、ロシア語とウクライナ語の関係みたいなものを知りたいと思って、自分で勉強していきました。こんなに薄いのに、3,090 円。売れてないと思います。

その次に興味を持ったのが、ロシアとポーランドの間にある国、ベラルーシです。ということで、皆さん、嫌な予感がするかと思うんですが、『ベラルーシ語基礎 1500 語』もあります。これはさらに売れません。今、こういうスラブの世界から離れていますが、これから再びやってみようかなと考えています。

6番目、語学書の書評家。白水社という出版社が出している広報紙『出版ダイジェスト』に毎回、白水社から出た語学書の書評を書いています。あらゆる言語の本の書評をもう6年ぐらい書いています。私は言語の入門書や語学書も、書評の対象になって当然だと思っていますが、多くの新聞社その他では対象外なんです。1人で頑張っているのですが、今のところ全く効果はありません。ただ、これを面白いと言ってくださる人がいて、これをきっかけに声がかかることもありますので、どんな仕事でも丁寧にやっていくことが必要であると考えています。

7番目、語学のエッセイスト。最近はこの仕事が多いですね。具体的な言語ではなくて、外国語学習とか、外国語に首を突っ込んだような、そんなエッセイを書いています。一つは NHK テキスト『テレビでスペイン語』に連載しています。スペイン語はできないんですが、毎回言葉の話題を取り上げて書いています。白水社の『ふらんす』という雑誌にも、毎回フランス語に関する話題を連載しています。

こんなふうに四半世紀ぐらい言語とつきあってきましたが、言葉が、言語が道具であるとは思ったことはありません。なぜそう思わなかったのかをお話しするためにも、ここで自分自身の勉強の経緯を振り返ってみます。自分の話ばかりで、すみません。

まず、私は大学に6年間行っています。ロシア語に関しては、実は高校までにも勉強していたり、夜学の学校に通ったりもしていますが、それはここであまり重要ではないので省略します。

最初は東京の私立大学文学部史学科に入りました。そこで西洋史、中でもロシア史を専攻しようと考えていました。実はこれがベースにあったので、後に言語を専門にしながらも常に歴史の世界に興味を持ち続けてきた気がします。ここはすごくいい大学で、そのときの友人とは今でもつきあいがありますが、どうしてもロシア語をやりたかったので、上智大学外国語学部ロシア語学科に編入することを決意します。

編入試験の2次面接のとき、「ロシア語ができていない。2年生だったら、入れてやるけども、どうだ？」と言われました。もちろんそれで結構ですと答えました。最初の大学で2年生までやっていたんですが、次の上智大学では再び2年生になり、2、3、4年生と3年間かけて専門的にロシア語を勉強することになりました。この3年間は勉強になりました。史学科にいながらロシア語を勉強するのはすごく忙しく大変でしたので、やっとロシア語を専門的に勉強できるなと、とてもうれしく思ったものです。

ただ、私が上智大学4年生のとき、初めの大学の友人たちはもう社会人ですから、自分だけ大学生気分ではいられない気がして、大学は仕事だ、勉強するのが仕事だと考えるようになりました。そして、大学院進学を決意します。当時は好景気で就職がすごくいい時代でしたので、周りで進学を考える人はおらず、かなり浮いていました。先生の関係で東

京大学の大学院に行きたかったんですが、周りから「無理だよ。どうしても行きたいなら、東大に学士入学して3年生からやり直すといい」と言われて、今度は東京大学の3年生に編入します。

東京大学の露文は小さい専攻で、学部生も大学院生も一緒に授業を受けていたんですが、自分は大学院の人たちとそれほど力の差があるかなと感じて、先生に相談したら、「大学院を受けなよ。君は上智を卒業しているでしょ？　だから、受ける権利はあります」と言われました。「在学中に受けていいんですか」と言ったら、先生は片目をつぶって「さあ？」と。受けてみたら、合格です。ということで、せっかく編入したのに、また中退してしまいました。

お分かりでしょうか。一番初めの大学を中退して、それから、東京大学も中退です。つまり、私は2つの大学を中退しているんです。合計6年間も大学へ行っている割に、あまり卒業していない。困ったもんです。皆さんはちゃんとこの大学を出たほうがいいと思いますよ。あまり説得力がないですね。さらに、学生さんが卒業単位のことで泣きついてきても、聞く耳を持たないタイプです。「今、何年？　4年？　人生長いよ」「中退したって、生きていけるよ」とか言って、時代も違うのに、あまり優しくないです。

大学院は最低年限で、修士課程2年間と博士課程3年間でパッパと出ましたが、いわゆる博士論文は書いていません。これは当時の文学部でよくあるパターンです。実は論文を書くのが得意ではないのです。

私の専門はロシア語の古文でした。およそ一般には関心がない、どうでもいいような、あまり影響がないようなことを、ずっと研究していました。古文書とにらめっこしながら、この文法の語尾は何だろうと悩んだり、単語をノートやカードにとって考えたりということを、ずっとやっていたのです。博士課程では、博士論文を書くつもりがなくて、時間がかなり自由でしたので、先ほど紹介しましたウクライナ語、ベラルーシ語といったロシア語と系統の近い言語も独学で勉強していました。時間に余裕があるのは大切なことです。思い付いたことをいろいろやれますから。

ただ、そういう時間をもらっても、先立つものがなければ生きていけません。お金の問題です。学費を稼ぐためにアルバイトをたくさんしました。ロシア語の教師と通訳をやって学費を払っていたのです。経歴を見てもお分かりのように、私立大学に2つも行って親には金銭的に随分迷惑をかけましたから、学士入学のころからは自分で学費を払わなくてはいけないと考えていました。

ロシア語教師としては、企業研修、外国語の学校、大学の公開講座で教えました。企業研修の講師職はロシア語学校の先生が紹介してくれたものです。年齢より若く見られがちな私ですので、某有名商社に教えに行っていた21歳ぐらいのころは本当に子どもに見えたらしく、ガードマンに怪しまれて、控室へ連れて行かれたこともありました。教える相手は、随分おじさんに見えましたが、今思えば 30 代の半ばぐらいですかね。10 歳以上も年上を相手にロシア語を教えるわけですから、本当に冷や汗ものです。ほかに、専門学校や公開講座でも教えていましたし、大学院博士課程3年のときには大学の非常勤講師もやりました。千葉県にある神田外語大学、私が知っている中で一番楽しい大学ですが、そこでも4年ぐらい教えて、非常に勉強になりました。20 歳すぎから 26～27 歳までは、そうやってあちこちで稼いでいました。

もう1つは通訳のバイトです。教師業だけでは、お金が足りませんでしたから。当時はペレストロイカのおかげで仕事がありました。日本人を連れてソ連に行ったり、反対にソ連から来る人たちを案内したり、そういう通訳です。20 年前、ロシア人を連れて名古屋城など名古屋の案内をしたこともあります。あと、会議通訳もやりました。旧ソ連大使館で国際婦人デーの会議通訳とか、レクリエーションのときにも呼ばれました。「大使館の職員たちが日光に紅葉狩りに行くので、黒田君も一緒に来ない？　お弁当も出るよ」とか言われてノコノコついて行ったら、最初に日光市役所へ。市長のあいさつが始まったら、「はい、黒田さん」とか言われて、急に通訳させられたこともありましたね。

本当に恥ずかしいんですが、大学4年のときに、友人と2人でビデオの字幕作りのバイトもやりました。ソ連の戦争映画でしたが、謝礼がすごく安い。有名な映画配給会社に行きまして、そこですでにできている字幕をチェックする仕事です。21 歳ぐらいですから、なめられてはいけないと思って、偉そうな態度で、大きなロシア語の辞書をテーブルにバシーンと置いて、「はい、始めてください」と大家ぶったようなことを言っていました。そうすると、相手はこちらに一目置くようになります。言葉を使う仕事は、なめられたら終わりなんです。「こいつ、インチキだろう」「こいつ、ちゃんとやっていないだろう」と思われたら、仕事になりません。机の上に本をバシーンというのはちょっとやり過ぎかもしれませんが、とにかく仕事では、しっかり準備するだけではなくて、ちゃんとやれますというふうに見せることが大切です。「すみません、私、バカなんです」とか、謙虚すぎては駄目だということです。

通訳するときに特に気をつけなければいけないのは、固有名詞の順番です。たとえ外国語が分からない人でも、固有名詞が並んでいるところだけは分かります。例えば「名古屋、東京、大阪、京都」と外国語で言ったのを、うっかり「東京、名古屋、大阪、京都」と訳すと、「あ、順番が違う。こいつはインチキだな。ごまかしているんじゃないかな」と思われてしまいます。

当時は、このまま通訳の専門家になるのかなと自分でも思っていましたが、運良く東京工業大学のロシア語講師になることができました。そこでは理系の学生の気質に随分驚かされました。教えるとき、文系的な甘えが許されないのです。「ねえねえ、分かるよね？こんなもんだよね？」と言うと、文系の学生は「うんうん」とやさしく言ってくれますが、理系の子には「いえ、分かりません。ちゃんと説明してください」と言われますので、大変鍛えられました。もう1つ、理系の学生のよいところは自分の専門にプライドを持っていることです。そこに共感できました。プライドを持っている子たちにきちんと説明するためには、「なんとなく分かるよね？」みたいなことではいけないと意識するようになったのです。

私は教養科目担当教師だったので、ゼミはないのですが、ロシア語上級という、卒業単位とは関係ない科目も教えていました。多くの学生は外国語なんて単位をとればハイさようならなんですが、この上級にはロシア語をさらに勉強したい少数の熱心な学生が集まり、さらに私の研究室に入り浸るようになりました。毎週水曜日になると、研究室でコーヒーを飲んだり、ビールを飲んだり、お喋りしたり。気がついたら 20 人を超えていまして、とても楽しかったんです。ティーチング・アシスタントもいました。いろいろな外国語大学のウクライナ語学専攻、チェコ語学専攻の院生です。中には英語専攻の院生もいました。ロシア語を一生懸命やる理系の学生は英語嫌いが多かったんですが、彼らと接する中で、いろいろと変わってくることもあって、なかなかいい環境でした。

ただ、押し寄せる英語の波といいますか、実学志向の強い理系ではどうしても英語重視になります。この先、日本の大学でいくつの第2外国語が残るのか、現実問題として難しいでしょう。私の目の前からもロシア語を履修する学生がどんどん減っていきました。最後には、4つぐらい授業を開いても、各クラス2人とか3人という状態。楽でいいと言う先生もいましたが、私は悲しかったですね。自分でもロシア語しか教えられないことをとても残念に思い、だんだんと言語学も教えるようになりました。言葉を学ぶための有意義な情報提供を、言語学を通してできないかと考えたのです。私の言語学のとらえ方は、一般とはちょっと違うかもしれませんが。

そうこうしているうちに、英語の教師になってしまいます。ある時、友人から「私大の理工学部の英語教師をやらないか」と電話がかかってきたことがきっかけです。とても驚きましたが、やれないと断るのも悔しいし、自分の幅を広げていきたいと考えていた矢先だったので、受けることにしました。東工大の学生には「先生、ひどいよ」と恨まれましたが、人生、しょうがないですね。

主に一般教養の英語を担当したのですが、なかなか勉強になりました。ところが理工学部だけではなく、「文学部にも出講して、英文専攻で英語学として語用論を教えてくれ」と言われまして、断ればいいのに、また「はい」とか言ってしまうんですね。電話を切った後で、語用論って何だろうと調べるぐらい分かっていなかったんですが、やはりそこで断ったら悔しいなと。そういうわけで、文学部でも教えていました。

当時の教え子たちは、いまだに私のことを英語の専門家だと信じています。理工学部で英語を習っている子たちにせよ、文学部英文専攻の子たちにせよ、ロシア語教師としての私を知らず、英語教師だと思っているんです。「新聞を見たら、先生と同姓同名の人がロシア語の教科書を書いているよ」とか、「変なうわさを聞いたんですが、先生はロシア語なんかできませんよね」とか言ってくる学生もいて、何と答えたらいいか困ったものです。私の全部の面を知っている人はあまりいません。

いつも行く飲み屋で、あちこちの教え子たちを集めてコンパをやることがあるんですが、そこに集まるのは同じ言語を習った教え子とは限りません。この人はロシア語を習った、この人は言語学を習った、この人は英語を習ったというふうにバラバラです。それが私の特徴なんでしょう。

英語教師も楽しかったのですが、理工学部における教養英語に対する風当たりといいますか、そういうものもいろいろ感じるようになりました。理系の教師には実用しか理解できないのではないかと悩みました。また英語教育のやり方に枠をはめようとする動きがあって、私はそういうのにうまく対応できそうになかったので、大学を辞めて、違うことをやろうかなと考えるようになります。目の前の学生も大事ですが、高校生や社会人に何かを伝えていくことも大事です。結局、大学を辞めることにして、これまた学生に恨まれてしまいました。

多くの人から「よく大学を辞めましたね。大学を辞めた本当の理由は何ですか」とか聞かれますが、20 ぐらいの小さな要因が5%ずつ積み重なったとしか答えられません。ただ、私自身の性格が大学の教師としての資質に欠けることは間違いありません。

こんなふうにして今があるわけですが、もう少しまともな話をしましょうか。私にとって「外国語とは何か」ということです。

仕事としての外国語といいますか、バイト時代もそうですが、私はプロであるというプライ

ドをすごく強く持っています。ですから、何があっても間に合わせなければいけないと考えています。通訳なら、絶対に準備します。どんな分野でも勉強しますし、出てきそうな単語は前もって全部チェックします。時間厳守で、決められた時間には間違いなく現地にいるよう心がけています。

教師として大事なことは、面白いことと分かりやすいことの2つであると考えています。もともと身銭を切って勉強に来ている社会人学級で教えていたので、余計そう思うのかもしれません。面白くて分かりやすくなければ、みんな来なくなりますし、そうなったら授業が成立しません。この2つは大学の教師をやっているときも心がけていました。全体から見ると少しずれていたかもしれませんが、一部の学生はとても喜んでくれました。

私は本当にバカみたいに外国語がうまくなりたいと思っていました。今でも思っています。とにかく上手になりたい。そのためには、発音をよくして、語彙を増やして、表現を身につけて、さらには現地の事情に通じていなければいけない思い、がむしゃらに頑張りました。東京でロシア語通訳の専門学校に通っていましたが、そこの先生はとても厳しく、かなり上級になっても、「それはロシア語じゃない」と言われたものです。「ジュの音が悪い」と先生に指摘されると、駅から自宅までの帰り道、シャッターが閉まった商店街を「ジュ、ジュ、ジュ」と言いながら歩くんです。すると、前を歩いているサラリーマンは、私のことを変な人だと思うのか、どんどん早足になります。そんな悔しくも悲しい思い出さえあります。外国語学習には魔法はないと思っていますので、そんな経験をしながらも頑張ってきました。

それなのに、ロシア語だけに閉じこもりたくないとも考えています。同じスラブ系の言語であるセルビア語、チェコ語、ポーランド語なども勉強しました。また、必要な文献を読むためにも、フランス語は高校生ぐらいからラジオ講座を聞いていましたし、ドイツ語は大学2年生のときに習いました。ちっともうまくなっていませんが。

でも、勘違いしてほしくないのは、必要だと考えたから勉強してきたのであって、語学オタクではないということです。世界中の言葉であいさつして、世界中の言葉でアイラブユーを言いたい、そういうのではありません。必ず中心にロシア語があって、常にそれを広げるためにいろいろ勉強しているのです。これが私のやり方です。そのためにはいろいろなことをやります。最近、大学院で言語学をやっている人に「黒田先生は変わってしまった。インチキな言語屋になってしまった」とののしられ、とても悲しかったたのですが、仕方がありません。いい影響もたくさんあったわけですから、こういう非難も我慢しなければなりません。

今は専任として大学に勤めていませんが、別に大学と正面からけんかしたわけではありません。大学とはこれからもつきあっていくつもりです。だから、大学教育についても考えています。

大学教育では、特に文系の皆さんにとって必要なことが2つあると考えています。1つは、本の読み方。2つ目は、外国語の学習。この2つさえ身につけられれば、4年間の大学生活は大成功だと思います。

本の読み方は今回のテーマではありませんが、勝手な読み方をしてはいけない、テキストはちゃんと読まなければいけないということです。ブログその他に見る読解力の欠如はいずれ問題になると思います。また、批判的に読むことと批判することの区別がつかない人も多いです。読んだら、悪口を言えばいいとか。それは違います。本を読むことや人を評

価することはそういうことではありません。正確に本を読むところから考えてもらいたい。大学にいる間にきちんとした読み方を身につけてもらえたらと思います。

2つ目は外国語の学習。外国語が理解できれば、情報の幅が広がります。しかも大学時代に身につけた学習方法は、後に大きな影響を与えます。私は大学に6年間いましたが、今でもそのころの学習法が基になっています。たとえば単語。基礎単語はしっかり身につけるために努力します。ウクライナ語を勉強していた当時は、日本語で書かれたウクライナ語の教科書がなかったので、英語やロシア語で書かれた本を集めて勉強するしかありませんでした。バランスよく単語を増やすために単語集が欲しいと思って、自分でワープロをピョコピョコ打ちながら作っていたら、出版社のほうから「それを本にしませんか」と話が来て、それでできたのがさっきお見せした本です。もともとは自分の勉強用に作ったものだったのです。このやり方が私の基本ですし、この時期の勉強は本当に大事だとつくづく感じています。

お話ししていませんでしたが、私には留学の経験がありません。外国に行ったことは何度もありますが、仕事として通訳で行くことが多くて、勉強ではなかったんです。後にサマーセミナーの1カ月コースにチェコ語、ポーランド語、ウクライナ語、リトアニア語の勉強のために各地へ行ったことはありますが、ロシア語、英語のための長期留学の経験はありません。しかも今よりも情報が少ない時代でしたから、人から話を聞いたり、本をコピーしたりしながら手探りで勉強するしかなかったのです。

外国語の勉強は時間がかかるものです。知識や判断力というものは、急に身につくこともなければ、大学の在学中に完結するものでもありません。社会人になっても勉強を続けなければ、うまくならないのではないでしょうか。大学在学中の4年間ですべて習得できるというのはウソです。そんなことはあり得ません。もし4年間で英語がペラペラになりますと宣伝している外国学部があったら、気をつけましょう。私は信じられません。もがき苦しんでいるときに手を差し伸べてくれるのがいい大学で、いい先生です。これは私のポリシーです。勉強を始めて 25 年ぐらいたって、最近やっとロシア語と、英語が少し楽になったかなと思っています。ある人は外国語学習のことを「水の中で目を開けているようだ」と言いましたが、本当にそんな感じです。なかなか見えないのです。でも、やめたら、終わりです。

再び「言葉は道具なのか」ということに戻りましょう。先ほど話した外国語大学の授業のことですが、とくに最初のうちは、学生から意見を集めるだけにして、私がコメントをつけたり、特に評価したりしないようにしています。私とは違った「言葉自身を目指してはいけない」「言葉を通して、その地域研究をやりたい」「それを通して文学を読みたい」という意見もそれでいいとして、道具かどうかということに関してはペンディングにしたまま、言語の系統や音の話、語彙について授業を進めます。そして、語用論と方言論のところで再びこれを思い出してもらいます。

語用論とは何か。言葉はシチュエーションによって意味が変わることがあって、辞書に載っている意味だけを表すのではありません。例えば「今日は暑いね」と言ったときに、そこにどんな意味があるのか。気温の情報だけを言っている人はあまりいないでしょう。もしかしたら、「窓を開けてよ」と言いたいのかもしれないし、「エアコンのスイッチを入れてよ」と言っているかもしれない。あるいは、「エアコンのスイッチを入れていいですか」というつもりか

もしれない。「帰りはちょっとビアホールで」という意味すら考えられます。それが実際の言語の運用ではないか。そんな話をします。

例えばこんな例を挙げます。同語反復というんですが、「遅刻は遅刻だ」という文章をどう思いますか。意味的に考えると、「A＝Aで」という当たり前のこと、当然のことを表しているわけですが、この言葉はそれしか伝えていないでしょうか。遅刻した学生が「先生、すみません。なんか今日、電車が遅れちゃって」と言ったときに、私が「遅刻は遅刻だね」と言ったら、何が伝わりますか。「先生、当たり前だよ。そんなこと言ってるんじゃないよ」と答える人はいませんよね。「やっぱり駄目ですか……」とか言って。

言葉が道具だったら「A＝A」に「A＝A」以上の意味を持たせるのは効率的ではないでしょう。それ以外のものを伝えるとすれば、言葉は単なる道具とはいえないのではないでしょうか。そんなふうに私が話を進めていくと、「ああ、なるほどな」と思ってくれる学生も現れます。

もう1つ挙げましょう。反語表現。「文句があるなら、言ってみろ」と言われたときに、表面的な意味だけをとらえて文句を言ってしまうと大変なことになります。あらゆる言語にこのような反語表現があるのではないでしょうか。そこで私は、「道具にしては随分複雑だね。単純ではないな。それでも道具といえるのかな？」というところから揺さぶりをかけます。

方言論のときにも、やはりこの問題を思い出してもらいます。学生たちには「自分の持っている方言と思われる表現の中で、黒田先生が知らないだろうなと思うものを挙げて、説明してください」という課題を出します。学生たちはすごく一生懸命書きます。「先生、これは知らないでしょ？」とか、「こんな表現があるんですよ」とか、すごく盛り上がります。それぞれいろいろな思い出を書いてくれます。

大学にはいろいろな地域から学生が集まっています。言葉については、みんな何かしら悩みを持っています。関東近県に住んでいても、自分の言葉はみんなと違うんじゃないか、バカにされるんじゃないかと心配している学生もいます。反対に、自分の言葉を堂々と発言していこう、自分の言葉を守っていこう、自分の方言を広めようとしている学生もいます。自分の方言を大事に思っている学生たちを前に、「言葉は道具ですか」と聞くと、もう「はい」と言う人はいなくなります。次に、「皆さんが持っている方言は道具ではないのに、外国語は道具なの？　その外国語も誰かにとって大事なものじゃないのかな？」と話を進めると、言葉は道具でないという考えの人が出てきます。強制はしていませんが、こんなふうに、いろんな方向からじわじわ攻めていきます。

だんだん結論に近くなってきますが、私には言葉というか、言語が道具であるとはどうしても思えないのです。先ほど語用論で言ったように、言語はあまりにも複雑な構造を持っていて、道具みたいには使いこなせないと考えるからです。コンピュータも複雑かもしれませんが、言語ほど手ごわい道具はないでしょう。もちろん、道具ととらえてもいいんですが、それが使いこなせなかったら、自分がみじめじゃないでしょうか。それに、言語は道具だ、言葉は道具だという意見には、非人間的な冷たいニュアンスが感じられて嫌なのです。方言は道具だと言われたら、皆さんの使っている言葉は単なる道具だと言われたら、どうでしょうか。あるいは、外国から日本に勉強に来ている人に「日本語は私にとって単なる道具にすぎません」と言われたら、どうでしょうか。私はさみしい気がします。

どうして「言語は道具である」と言うのでしょうか。かつて外国語をうまく身につけられなか

った人が悔し紛れに言っているのでしょうか。あるいは、昔、中学や高校のときに、細かい文法をやる英語の先生にネチネチいじめられた記憶が悔しくて、「そんなの、使いこなせりゃいいんだよ。言葉なんて道具なんだから」と言いたくなってしまったのかもしれません。そう言って気分をすっとさせているだけならいいんですが、お父さん、お母さん、保護者の方、学校の先生、予備校の先生が、子供や生徒に「言葉なんて、言語なんて道具だからさ」と言っているのを聞くと、恨みを受け継いでいるみたいで嫌な気がして、それは違うのではないかと思うのです。

私は「言語は道具ではなくて、文化である」と考えたいのです。文化とは、人の心に関係するあらゆることです。そう考えてきたからこそ、いくつかの外国語が話せるようになったと思っています。道具だと考えなかったから、これまでお話ししたような私の体験があるのです。

もちろん、体験は個人によって違うものですから、これを一般化するつもりはありません。人に強制しようとも思っていません。ただ皆さんには、誰かの受け売りではなくて、自分で考えた道を歩んでもらいたい。外国学部の方が外国語を専攻するとき、道具と思って勉強するのもいいけど、自分で考えてみてほしいのです。「黒田さんの意見とは違って、こういう面から考えれば道具だ」というのでもいいんです。とにかく、人に踊らされるのではなく、自分で考えて進めていかないと駄目ではないでしょうか。

この講演は、多くの方に共通してプラスになることをと思って話をしましたが、どうだったでしょうか。私の経歴は継ぎ接ぎだらけのパッチワークみたいで、とても恥ずかしいものですが、その中で1つでも2つでも面白いと思っていただけたら、うれしいです。

最後に、皆さんにとって言葉は道具でしょうか。
これで終わりにいたします。ありがとうございました。

（2009.06.02）